

| | |
|------------------|---|
| Title | 失われたる古写本の出現：「浄瑠璃物語研究」補遺 |
| Sub Title | On the discovery of two old manuscripts |
| Author | 森, 武之助(Mori, Takenosuke) |
| Publisher | 慶應義塾大学藝文学会 |
| Publication year | 1963 |
| Jtitle | 藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.14/15, (1963. 1) ,p.47- 57 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 西脇順三郎先生記念論文集 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00140001-0047 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

失われたる古写本の出現

——「浄瑠璃物語研究」補遺——

I

森 武之助

日本の古典を研究している者は、その学問的基礎を確定させるような新資料の出現を待望して、いつの日か、もしやと、果無い夢を、誰でも持ち続けているものである。

家持筆写の万葉集祖本、源氏物語の道長所持本が、どこかに存在しているのではないか、などと放言すれば、バカげた痴人の夢と、嗤いものにされるであろうが、そのような大き過ぎる夢を捨て、時代を、やゝ下げれば、予想もつかなくつた未知の新資料が、今日もしばしば、聞きなれぬ題名の書物の姿に於て、我々の眼前に現れ出て来ているのである。殊に、室町期や江戸期文芸の未知の資料は、昭和年代に入ってから、おびただしくその数を増したことは、誰もよく知るところであろう。

今日、一寸考えると、日本の古書は、苛酷な天災と、戦火の為に消滅の一途を早め、幸いに埋れ残されていた少数も、既にすっかり掘り起され、露呈し尽したような気になるのであるが、事實は、表土は厚く、意外に底は深かったようである。まだ、何処かの陰に

眠ったまゝ生き長らえているものが、随分あるのではないかと、近頃つくづく思うようになった。そして、我々が、それ／＼の専門の上になつて、まるで弥勒仏を信ずるように、常識を越えるような、新資料出現の幻を画き続けていたとて、一概に、痴夢と嗤うわけにはいかないはずだ、と信じるようになって来たのである。

こんなことを記したくなつたわけは、ごく最近、声を大きくして云う程のものではないけれど、私の小さな夢の書が、突然、眼前にその姿を現わしたからである。

去る五月二十日の午頃。私は、一束の郵便物を、家で受取った。その中には書簡と異なる、際立って大形の目録本らしいつゞみがあった。それは、かねて古書肆から予告があつたので、すぐに解つたのである。五月二十九日から、日本橋の百貨店で開かれる、古書大即売会の出品目録である。薄曇りのおだやかな初夏のひる下り、私は、自室でゆっくり、頁を繰り出した。

紙面一杯に、ひしめき並んでいる書名とその価段付けをみて、感心したり、或は考えたり、又、善本、珍本の写真を眺めたりして、暫らく時間を過していたが、和本の部、六十三頁に及んで、一瞬、私は息を呑んだ。そこには、次のように記されていた。

四一六 異本 浄瑠璃御前物語 文禄慶長頃写
極大形本

四一七 異本 浄瑠璃御前物語 天正十三年古写
極大形古雅絵入

活字は、ゴシックで組まれている。そして、この二書には共に、山崎美成旧蔵の朱印記が存在し、前者は流布本の十二段と異り、十六段を有する異本、後者は、天正十三年と、年記が在る旨の解題が述べられていた。

私は、文字通り呆然とした。確実な書に記載されていて、その存在したことは明らかであるが、その後、沓として姿を見失つた書が、約一世紀半を隔てた今日、しかも二書揃つて出現したからである。やがて、私は、動揺し、狼狽しだした。と申すのは、私事に渡り恐縮ではあるが、昨年、私は浄瑠璃物語の考察を、一応まとめ終えていたからである。そこには当然、この二書に対する推定の論も記述していたのであった。但し、私の周章狼狽したわけは、既に記述したこの二書に対する自分の推論が、覆ることを恐れての為では

ない。そんなことは、とるにたらぬ。出会うことなど夢想もしていなかった、この二書の名を目録中に発見して、たゞに瞠目して、なすところが無かったのである。

しばらくして私は、当然のことながら、なんとしてでも、この書を自分の手にとり、自分の眼で見ねばならぬ、と心に思った。どうしたらよいか。値段は、合計数十万の金額である。が、例えその都合がついたところで、この場合は、金策だけすれば、それで決定したというわけにはいかないのである。理由は、今度の古書の売立は、即売会であって、入札会ではないからだ。すると、下見の時、よく見て決めるなどという、悠長な暇はない。一番足早く会場に走り着き、一番手早く書物を握った者の勝利なのである。そして、名も知らぬ個人の架書となってしまうたら、又いつの日か見ることを得るか。まず望は無いだろう。なんとかして、姿を現わしている今のうちに、一読してしまわねばならぬ。目録に出たことは知っていたが、見ることは不可能だった、などの弁解は許されない。如何なる手段で、それを達するか。

私は、間もなく、結論に至った。この二重三重の難関を突破することは、非力な私一人で、よくすることではない。強力な諸彦の、各方面からの、御援助を願う以外はない。そこで、私は、すぐ外出の用意をした。

II

「文政七年八月」というから、今から凡そ、百三、四十年前の昔である。滝沢馬琴は、松蘿館主人（西原好和）、海棠庵（関思亮）、南無仏庵（中村景蓮）等と謀って、友人五、六名、各自秘蔵の古書画、古器を携えて一堂に会し展覧する、「耽奇会」の第一回を開いた。そして、この耽奇会は、続いて毎月開催され、翌、文政八年まで重ねられたのであって、如何にも、太平の江戸に往んだ騷人にふさわしい、好事の企といえよう。その上、この会員達は、展覧の後を、その時だけのこととして忘れるにまかせず、その度毎に、出品物の図本を作り、考証を附して筆録し、各人回覧の便を採ったのであった。この伝本は二、三あるらしいが、その一つに馬琴編の「耽奇漫録」五巻本がある。馬琴は、この書に序して、次の如く云う。

この会は、甲申の春（文政7）より乙酉（文政8）の冬十一月まで、凡二十会にして訖りぬ。その一会毎に図本を合して二十巻に

して、蔵棄せるものは、亡友海榮庵以下、多くあらずと云。こゝには纔に十会評の図本あり、今、合して五巻とす。

現在、宮内庁書陵部に、その謄本は存在するし、この書をそのまゝオフセットにした複製本も刊行されている。私は、それによって見たのである。この第一回の時の記事に、次の如き記載がある。

浄瑠璃御前物語絵入古写本

この物語は、豊臣太閤の御時、をのゝ於通といふ女房の御台のおほせをうけて、三河国矢橋の宿長か娘、浄瑠璃姫のことを十二段の草子に作りしなり、のちに、これに節はかせをつけて、唄ひものとなしたるといへり、世に浄瑠璃といふうたひものは、これを起源とす、といへれど猶、享禄天文のころ、既に浄るりといふ、うたひものゝ名目見ゆれば、此物語より、その名の始れるにあらざるをしるへし、くはしき事は、予、別に考ある事、長ければ、こゝにもらしつ

この草子は、板行の世に行れたりし已前のもの也、うつせる年代、いまだ詳ならず、但、文は流布の板本に異なる事もなければ、こゝにうつし出さぬ也

そして、原本中の挿画二葉を、彩色を付して載せている。一葉は、御曹子が横笛を吹いている図であつて、その右肩上に「笛のだん」という文字が見える。二葉目は、浄瑠璃姫が、女房達と管絃している図柄である。原本の文章の所を模写したものは、残念ながら、無い。そして、この書の出品者は、好問堂山崎美成である。

山崎美成は、江戸下谷長者町の菓舗主であるが、和漢古今の書を渉獵した博学の者で、晩年、この為に禄仕した程の学者である。そして、浄瑠璃物語についても発言があり、その著「麓の花」に、次の如く述べている。

余、寛永の此の印本にて、十二段草子とうはぶみせる、三冊のものを、もたり。また外に、浄瑠璃物語の古写本二本、及び、近き写本一本をおさむ。各異同あるが中に、いたく違へるは、天正頃の写本には、十六段にわかつてり。そのうへ、文も、ことにながやかに、書なしたり。これを見れば、葉師十二神を象るといふは妄なることしるべし

又、この記述に相呼応した如く、柳亭種彦の著、「足薪翁之記」巻三中に、次の如き条がある。

——又、友人の蔵書に、十六段本あり、御ざうし、ひたゝれ乞の段は、他本に見えず。かくさまぐの異本あれど、みな天正前の

添削とおほしく、俗言の内に雅あり。いづれか原本ならむ。今は考へ難し。

以上の、三つの古記録を、こゝに整理してみると、次のことが確定される。

(一)、山崎美成は、浄瑠璃物語の写本、刊本を数種所持していたが、その中から、絵入古写本一本を選択して、耽奇会に出品した。その本は、刊本出現以前の古きものであるが、本文は流布本と同じである。

(二)、山崎美成は、その所持する浄瑠璃物語諸本のうち、本文が他と比べて長く、且、大変に異っている十六段分割本を持っている。その筆写年代は天正頃だという。

(三)、柳亭種彦は、或る、自分の友人は、十六段分割の浄瑠璃物語を所持していて、それには「御ざうしひたゝれ乞の段」という条があり、これは、この本独自のものである、と報じている。

以上の三つの記述に対して、私は、それ々々次の如く考えた。

(一)、「耽奇漫録」に載るところの二葉の挿画の模写をみると、古い奈良絵本らしいと思えるが、原本の本文は、流布本——たぶん後の刊本の意味であろう——と同一であるという点、又、挿画中の御曹子の肩の刃りに「笛のだん」と筆跡があるが、かゝる場所に段名の標目をのみ記したのは、例をみないし、字体も、どうやら新しいようである。この二点が、如何にも不審である。しかし、いゝかげんな本ではない、はずである。美成は、所持本中、最も稀覯と認めたからこそ、耽奇会に出品したのである。

(二)、山崎美成は、その頃、天正筆写の十六段分割本を、所持していた、という点のみ確認するに止る。但し、その本は、本文が他の本と「いたく違へる」と云うのであるから、流布本と同じ本文を有する耽奇会出品本とは、別の本であることは、確実である。十六段分割本は、現在、赤木文庫蔵、室町末期筆写の絵巻以外に、知らない。そして、この二つは別であろうから、十六段分割の浄瑠璃物語は、少くとも二種類あったことになる。

(三)、柳亭種彦のいう、十六段分割本を持っていた「友人」とは誰であろう。たぶん、山崎美成と考えて、誤りないとは思うが、絶対とは云えぬ。そして、云うところの「御ざうしひたゝれ乞の段」とは何か。赤木文庫絵巻を始めとして、他本にも、その片鱗さえ見られぬ。文政期の種彦より、昭和期の私の方が、浄瑠璃物語の諸本を、数多く見ているはずである。すると、以後、まったく姿を見失い

埋れてしまった、非常に独自な一異本があったのである。

耽奇会に出品した不思議な絵入古写本、「いたく異へる」十六段分割本、この確かに過去に存在していた美成所持の二書は、その後、何時、何処へ姿を消してしまったのか。塵にまぎれ腐ち失せたか、煙と化して空に昇ったか。

Ⅲ

五月二十九日。午前十時の開場と同時に、古書即売会の広い会場は、一瞬にして、人の海と化した。そして即時に、この二書の帰趨も決定した。幸運にも、この二書は、それが落附くにあふましい所に、美事に至り着いたのである。一本は、某大図書館に、一本は、有力な文庫に収められたのである。その余慶は私が頂戴し、こゝに、ゆっくりと二書の書型を記せるのである。

しやうり御前物語

大形奈良絵本。一冊。

装幀。鳥の子紙。竪三十七幅。横二十三・二幅。

表紙。鳥の子紙。「しやうり御前物語」と、中央に墨書。但、本文と別筆。又、左下部に「上」とあれど、別筆。

題簽。なし。

本文。十一行。巻末部分には十三行もあり。一行約二十五六字。

丁数。二十七丁半。(六段以下を欠く。)

画図。四オ。四ウ五オ(見開)。六ウ七オ。八ウ九オ。十オ。十ウ十一オ。十四オ。十四ウ。十五ウ十六オ。十七ウ十八オ。二

十一オ。二十一ウ。二十三ウ二十四オ。絵は雅拙なれど、胡粉厚く残り色彩美し。

筆写年代。室町末期。巻末(二十七オ)に本文とやゝ離れて「天正十三五月日」とあるが、墨色も異り別筆と思える。

印記。表紙右肩に「野島蔵書」の朱方印。一ノオ右下に「好問堂」の長円朱印。

しやうるり御せん物語

大形写本。一冊。

装幀。楮紙袋綴。竪三十一・一種。横二十三種。

表紙。楮紙（改装）。「しやうるり御せん物語」と中央に墨書。左下部に「下」とあり、絵入大形本と同じであり、同筆と思う。

題簽。なし。

本文。十二行。一行約二十二、三字。

丁数。六十丁。

画図。なし。

筆写年代。室町末期。但、絵入大形本より下ると思われる。

印記。「野島蔵書」、「好問堂」朱印、絵入大形本と、まったく同一。

絵入大形写本は、堂々たる書籍で、挿画も好ましいものである。正しく「耽奇漫録」に載せた書で、本書の挿画十五ウ十六オが模写されていたのであった。私が不審に思った「笛のだん」の字は、臨写の折のさかしらであった。原本には影もない。真に、百聞一見に如かずである。

本文を読んで検討すると、この書は、大東急記念文庫蔵の大形絵入写本と同系統、と云うより、まったく同文といつてよいものである。すると、二書どちらが、より古いかの問題にも及ばねばならぬが、二書の形態から見ての、その前後は知らない。筆跡、墨色、紙、書型を眺めて、経験と勘を手頼りに決めるのであるから、ごく近接する年代の差異を主張しても、無意味である。それならば、本文を比較しての特色は見出せぬかという、大東急文庫本に存在する数多い衍字が、これには無い。それに語句に於て、こちらの方が、やゝ正しくなっている。この点、桜井慶二郎氏蔵本と同一のようにとられるかもしれないが、勿論、これは、それよりぐんと古い。ほんの少し存在する異同の語句から、何か手掛りを探し出せないかと詮索すると、例えば、大東急蔵本は「いるり」とあるところが、こちら

は「いろり」となっている。犬筑波集の古本など「いろり」を用いているから、「いろり」の方が、新しいのではないかと思ひ、辞書に当たってみると、天正十八年節用集は「いろり」を載せ、饅頭屋本は「いろり」を載せている。しかく、簡単にはいかない。

この書と同系のものは、大東急記念文庫本以外に、天理図書館蔵の一本がある。大東急本と天理本は、一卵雙生児とも、又、うり二つの親子とも思える関係にある。そこへ又々、異母兄ぐらゐに當る、この美成旧蔵本が出現したわけである。唯、返すくも残念なことは、解題に記した如く、これは、十二段の後半を欠く零本であることである。

最後に、未だ疑問に残ることは、流布本と本文は交らぬという「耽奇漫録」の記載であるが、勿論同じ物語の諸本であるから、すじは同じである。それで当時は、細い語句の異同など問題にしてなかつた、と考へて解決してよいかもしれない。が、大東急系の本は「吹上」を欠くという大きな特色をもっている。天理本は云うまでもなく、桜井氏本も欠いているのである。流布本と称するものに「吹上」を欠くものがあるとは思えない。美成旧蔵本は、比較すべき後半を元来から欠いていたから、そう記述したのか。今の私は、これ以上は云うことを持っていない。

他の一書、十六段割分本は、美成の云う如く他本と「いたく違へる」本であり、種彦の云った「御ざうしひたゝれ乞の段」に當る条も正に存在する、待望の書であつた。且、「ながやかに書きながし」た、浄瑠璃物語諸本中の最長篇であつた。同じ十六段分割でも、赤木文庫蔵絵巻は、特異説話の挿入という点を除き、その脚色は、十二段構成のもの、埒外に出てはいないのである。ところがこの書は、「吹上」の後に、御曹子の奥州入り、浄瑠璃姫の自害を語り、母の長者の入水を語り続けているのである。かゝる、改造と云うべきか、書継ぎと称すべきか、とにかく著しく、いぢり廻された本文を有する異本の例は、唯一つ、熱海美術館蔵絵巻十二巻がある。この絵巻も、「吹上」の後を語り、御曹子が平家追討の途上、矢作にて浄瑠璃姫の墓所に詣でる、所謂、「五輪くだき」が語られ、最後は、母の長者の柴漬に至るのである。

このように記すと、二書は如何にも近似している如くに、とれるが、実は書継ぎの部分に、著しく相違があるのである。それは、熱海美術館絵巻の「吹上」の部分に、長門掾正本「ふきあけ」を採用し、それに続けて「五輪くだき」の条は、南無右衛門正本と思える「下り八島」の四段目後半から六段目までを、詳細に写しているのであつて、長者の柴漬のみが、独自の添加である。そして、この独

自な添加は、数百字程度の記述に過ぎない。ところが、美成本は、「吹上」以下の独自の記述は、四百字詰原稿用紙にして十五、六枚に及ぶ量を占め、その秀衡入りの部分は、確かに伊勢島宮内の「ふきあけひてひら入」に近似することは認められるが、熱海絵巻の如く、正本を引写したものでない。且、浄瑠璃姫は御曹子に侮辱されたと感じ、「へいけかたの、もんじゆのまい」の讒言の為に自害するのである。母の長者は、熱海美術館絵巻では敵役に廻り、刑死するのであるが、美成本に於ては、愛姫の死を悲しむあまり入水すると云う、真に独自の、不思議なすじを語っているのである。熱海美術館の絵巻は、書継ぎの製作を、古浄瑠璃正本に依頼してしまつたが、美成の十六段本は、多くの恣意の語りを、新しく創り加えたのであつた。その為であろう、熱海美術館絵巻の文は、さすがに整備され、よく通るが、美成本は、「吹上」以下に至ると、語句の不善、文脈の乱れが、所々に、眼に付くのである。そして物語の最終箇所——その、ちは、きた山の御せんとして、これもかくれぬ、めいしんなれば、それに、ころをうつつし、あさからぬちきりを、こめたまひて、てんかを、おさめたまひける——などは、もう、浄瑠璃姫物語を逸脱する方向に、一步踏み込んでゐるものと、云えよう。

この美成十六段本の出現によつて、浄瑠璃物語の書継ぎ、改造が、意外に古く行われていたことを、私は教えられた。今まで、漫然と、近世初頭頃であろうと思つていたが、それは取消さねばならない。三省すれば、或はこれは自明のこととも云える。それは、他の多くの判官説語の分蘖は、既に室町期に成つていたからである。唯、既に「浄瑠璃物語研究」で述べた通り、この物語は、「申子」を冒頭とし、御曹子の求愛を艶書調で飾り、「吹上」を添加して終るのが、本格的な古い構造であるという結論は、例えこの書が出現した今も、変える必要はなさそうである。

私は、いつも「秋夜長物語」を羨しいと思つていた。「秋夜長物語」の古写本類は、浄瑠璃物語のその如き、室町末期写本どころではない。天文、明応、嘉吉に上り、ついに永和三年という実に一三七七年の古写本に至るのである。が、私も、この失われた二書の再出現に力を得た。これからも、浄瑠璃物語の、より古い写本出現の夢を続けてよいのだと、信じられて来たからである。

最後に、美成の十六段本以外まったく他本に無い、種彦の云う「御ざうしひたゝれ乞の段」に当る部分を翻刻して、この稿を終らうと思う。贅言を添えると、この条は、文芸手法として室町期文芸の「もの揃え」とも云うべき一典型で、なんの独自性もないが、話は

洵にヒューモラスな、間の抜けたと評すべきか、お読み下さればお解りの如く、まるで田舎を出て東京に下宿している学生が、お母さんに脊広をねだるような話で、それも、お母さんの常盤が十着の直垂を送ったのに牛若丸は、一つ一つに難癖をつけて着なかつたという、途方もない話である。こんな話は、たぶん西脇順三郎先生のお好みに合いそうだと思ひ、まづ先生のお笑ひの種にもならばと、ここに写してみたのである。

「さるほどに、御さうしは、とし七さいの、はるのころよりも、くらまのてらへそ、のほられける。くらまのてらと申は、ほうのかすは、七百はう、ちこのかすは、三百人、中にも、へいけのちこ七十六人、おはしけるか、ありけるひるの、つれ／＼に、ひとまところに、あつまりて、いかにかた／＼、きこしめせ、この山と申は、つきに六との、しゆつしもありければ、六つの小袖に、六くのひた／＼、きかへ／＼て、しゆつしを申事なれと、しやなわうとのと申は、いつもた／＼、あかふかきこそて、ひとつに、ふるきひた／＼れ一／＼にて、六とのしゆつしは、めされける。しやなわうとのに、にあひたる、あたなをつけて、わらはんとて、へいけかたに、むねともちいる、かとわきとの、御しそくに、なをば、はなわかとのと申せしか、これに、にあひた、あからそかは、むしのなかに、みむのしと申こそ、四せつに、いしやうを、かへされは、しやなわうとのを、みのむしちこと、よはんとて、いちとにとつと、わらはれける。

しやなわうとのは、ときならぬ、かほにもみちを、ひきちらし、ひとまところに、たち入て、なさけなふも、わらはれ候物かなとて、おほしめすまゝの事のはを、こま／＼とあそはして、は／＼の、ときわへ、おくられる。

ときは、このよし御らんして、なみたにむせはせ、たまひつ／＼、みやこのうちの、ぬひてをそろへ、十くのひたつれをそ、ぬわれたり。一には、まつのごほくを、ぬわれたり。二には、ませに、こきくを、ぬわれたり。三には、ねさ／＼に、をさ／＼お、ぬわれたり。四には、いそに、なみ、なききに、ちとりを、ぬわれたり。五に、たつしらなみに、ほかけふねを、ぬわれたり。六に、すみよしの、まつのごすゑを、ぬわれたり。七に、し／＼に、さうをそ、ぬわれたり。八に、一むらす／＼きに、ふちのはなを、ぬわれたり。九に、あきの野に、かうろき、はたおり、ぬわれたり。十に、たつたかわに、あしのおちはを、ぬわれたり。十くの、ひた／＼れを、くらまのてら、うしわかとのへそ、まいらせたまふ。

うしわか、このよし御らんして、まつにこほくを、ぬうたるは、五十はかりのひとのきてこそ、にあひたれ。ませにこきくを、ぬうたるは、廿はかりのひとのきてこそ、にあひたれ。ねさくにおさくを、ぬうたるは、かなこと申せは、いまわしや。いそになみ、なきさにちとりを、ぬうたるは、あまひときてこそ、にあひたれ。たつしらなみに、ほかけふねを、ぬうたるは、せんたうきてこそ、にあひたれ。すみ吉のまつこのまを、ぬうたるは、これまた、みやこに、おかりけり。しに、さうを、ぬうたるは、山ひときてこそ、にあひたれ。一むらすきに、ふしのはなを、ぬうたるは、さうしきてこそ、にあひたれ。あきの野に、かうろき、はたおり、ぬうたるは、これまた、あまり、おひくし、たつたかわに、あしのおちはを、ぬうたるわ、みなもとけんしの、たいしやう、うしわか、かといては、おちはと申すは、いまはしし。きるへきひたれ、一くもなしとて、もとざれける。そのうち、けもんしやを、このまれける。」